



労働者協同組合法人となった日本労働者協同組合連合会（以下、ワーカーズコープ連合会）は、これまでと同様に多様な協同組合との連携や研究所等との新たな連携など活動が広がっている。

日本協同組合連携機構（JCA）では、国際協同組合デー（毎年7月第一土曜日）に合わせて記念イベントを実行委員会方式で開催。今年は「協同組合は持続可能な社会づくりに貢献します」をスローガンに約200人が集り（オンラインも150人以上）、「これからの協同組合について話し合おう！」をテーマにワークショップも行った。ワーカーズコープ・センター事業団から「GO！上田地域福祉事業所」の中山陸美所長が、協同組合原則「自治と自立」（第4原則）や「コミュニティへの関与」（第7原則）の事例として発言。学童クラブの運営から保護者の願いを受け、障がい児の放課後の居場所づくりに向かったことや、協同の仲間づくりとして自らもパーキンソン病を患う中、できないことをさらけ出しながら一生懸命仕事をする姿を通して、仲間の理解が広がっていく実践を紹介。協同労働は、改めて現場で実践する中で生まれ、体感を通して広がっていくことを実感。

全国労働金庫協会主催のトップセミナーでも、ワーカーズコープ・センター事業団ほっけ地域福祉事業所の松崎愛所長が登壇。TEDという新しいプレゼン形式のなか、自分の介護や子育てで苦しかった体験

を通してワーカーズコープと出会い、自分の夢を答えたところ「一緒に社会を変えましょう」と言われ実践してきたことを報告。社会が支えてくれない現実を知り、自分たちで介護や子育て家庭を支える拠点を作ろうと、仲間呼びかけ、子ども食堂や物々交換などの取り組みを通して一人ひとりを受け止め、関係性づくりに取り組み、地域が変わってきたと発言。会場では涙を流しながら共感する人が多くいた。

全国漁業協同組合学校（1年全寮制、卒業後は100%就職率で漁業協同組合や漁師に若者になる）が昨年に続き、今年も労働者協同組合・協同労働を学ぶ時間をと、ワーカーズコープ・センター事業団が運営する印西市の学童クラブに、吉田博身校長先生自らも体験を含めて参加。若い生徒たちと労働者協同組合を学ぶことで、漁師の奥さんたちが地域で魚を活かした食堂を開くなど、漁業協同組合の新たな展開を推進することにつながるのではと議論した。

労働政策研究・研修機構（JILPT）や日本総合研究所（日本総研）も労働者協同組合・協同労働の可能性について今年度から研究することになり、ワーカーズコープ連合会として協力し、労働者協同組合法人のヒアリングや現場視察が始まる。労働者協同組合で働くことで、どのような働き方の変化や組合員の意識や行動の変化が生まれ、結果どのような地域への影響が生まれるのかなど研究が進めばと願う。